

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	史学専攻
研究代表者 (2025年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	□博士前期課程 年 ■博士後期課程 5年		阿部晃平
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		小澤実
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	初期中世における註釈行為の実態解明		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2025年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科・史学専攻・ 博士後期課程・5年		阿部晃平
研究期間	2024 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,094 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 本研究は、初期中世（とくに7~9世紀）のラテン語圏における註釈、あるいはテキストの「改変」という知的な実践行為の分析を通じて、当時の社会における「知」の在り方の一端を明らかにすることを目的とするものである。とりわけ、本研究においては、七自由学芸 <i>septem artes liberales</i> と称されたヨーロッパ社会における基礎教養科目の分類や、さらにその上位に位置づけられる哲学 <i>philosophia</i> の領域区分に関わる諸理論を主題として、当時の人びとがどのように「知」の総体を理解していたのか、手稿本の註釈や余白への図像の描き込みといった面から検討した。主たる史料としては、5世紀頃にカルタゴの異教徒マルティアヌス・カペッラによって著された『フィロロギアとメルクリウスの結婚』や、逸名の『ソロモンの哲学の書』を用いて分析を進めた。いずれのテキストも初期中世に広く読まれており、多くの写本が伝存しており、その写本にはさまざまな知的営為の痕跡が刻まれている。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[欄外註釈] [学問区分] [マルティアヌス・カペッラ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

『フィロロギアとメルクリウスの結婚』の註釈分析

カルタゴの異教徒マルティアヌス・カペッラによって5世紀に編まれた『フィロロギアとメルクリウスの結婚』(以下『結婚』)は、擬人化された七自由学芸が、神々の婚前の義において自らの学芸を説明してゆくという筋書きである。一部の修道士がその読書について疑念を呈するほど古代の異教神話に彩られてはいるが、しかし写本の伝存状況と附された膨大な註釈は、カロリング朝期において極めて広く読まれていたことを示している。ある種の矛盾を内包したこの自由学芸のテキストブックは、当時の人々の註釈行為の意義を探るうえでこの上ないサンプルとなる。

註釈の形態と研究史

『結婚』の註釈には主に3つの形態がある：

- ・ 欄外註釈形式 (Marginal commentary)：本文写本の余白や行間に書き込まれる形式
- ・ 連続註釈形式 (Running commentary/Lemmatized commentary)：註釈のみを別の写本にレンマ(註釈対象の本文の冒頭)ごとに書き連ねる形式
- ・ 併記註釈形式 (Text with commentary)：原文と連続註釈を併記する形式

従来の研究では、特に連続註釈形式が独立した「著作」とみなされ、その「著者」の特定に関心が集中してきた。12世紀以前の主要な註釈伝統は3人の「著者」に帰されてきた：

- ① 「最古の伝統」(Old gross tradition、かつてはランのマルティヌスに帰属)
- ② ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ (c. 815-c. 877)
- ③ オーセールのレミギウス (c. 841-908)

しかし1990年代頃から、「新たな文献学」の提唱や「読書の歴史」への関心の高まりにより、註釈行為それ自体が研究対象となり再評価されるようになった。特に①の全写本の再校訂により、複数人による註釈が混ざり合ったものであることが明らかになり、註釈の「重層性」が指摘されるようになった。

パリ写本の構造と成立過程

本研究で分析対象としたパリ写本 (Paris, BnF, lat. 8674) は、10世紀後半にオーセールのサン・ジェルマン修道院で作成されたと考えられる。一見すると③レミギウスの註釈が連続註釈形式で筆写されているように見えるが、詳細な分析により、非常に複雑な構造を持つことが明らかになった。この写本には、①「最古の伝統」の註釈および未特定の註釈が、③レミギウスの「本文」中にシームレスに混合されている。さらに余白にも「本文」と同一筆跡による複数の欄外註釈(註釈に対する註釈)が存在する。

パリ写本の成立には、少なくとも①と③の模本が必要だったと考えられる。③については、フィレンツェ写本 (Firenze, BML, Plut. 90 sup. 19, s. X) に依拠していることがほぼ確実である。両写本は共通のインキピット(冒頭文)を持ち、共通の加筆や欠落、意読、語順の転倒が散見される。特に、フィレンツェ写本独自の欄外註釈がパリ写本の「本文」中に混合されている例が確認できることから、パリ写本はフィレンツェ写本から直接筆写されたと考えられる。一方、①については、ライデン写本 (Leiden, UB, VLF 48, ca. 820-30) との親近性が高い。ライデン写本は現存最古の『結婚』の写本であり、オーセールフルーリー付近で筆写された Group A に分類される。ライデン写本とその子写本にしか確認されていない註釈がパリ写本にも見られることから、模本の一つはライデン写本かそれに類する写本である可能性が高い。つまり、パリ写本は、連続註釈形式③の写本(フィレンツェ写本)と、欄外註釈形式の①写本(おそらくライデン写本)をひとつに統合したものであり、「欄外註釈形式+連続註釈形式⇒連続註釈形式」というパターンを示している。

パリ写本独自の註釈の特徴

パリ写本には、①や③に由来しない独自の註釈も含まれている。これらの特徴として、以下の点が挙げられる：
古典からの引用の収集：

- ・ セルウィウスの『ウェルギリウス註解』、ソリヌスの『驚異なる事物について』、キケロの『老年について』などの古典作品からの直接引用
- ・ 同時代人アルクイヌスの『徳と修辞学の対話』からの引用(ただし著者名は言及せず)

独自の解釈を示す註釈：

- ・ 「2本の柱」と七自由学芸を結びつける解釈
- ・ フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』に由来する伝説を拡大解釈

研究成果の概要 (つづき)

特に注目すべきは、「2本の柱」と七自由学芸を結びつける註釈である。この註釈では、ノアの三人の息子が大洪水の前に7つの自由学芸を2つの柱(一方は煉瓦製、他方は石製)に書き記したという伝説が語られる。大洪水後、煉瓦製の柱は水で溶けて失われたが、石製の柱はエジプトで発見され、アブラハムはその石柱に従い天文学を教えたという。この伝説はヨセフスの『ユダヤ古代史』に由来するが、パリ写本の註釈では、柱に刻まれた内容が天文学から七自由学芸全体に拡張され、柱の発見場所もシリアからエジプトに変更されている。これは『結婚』の内容を聖書の歴史と紐付けて再解釈し、七自由学芸の起源をアダムの息子たちにまで遡らせるものであり、カロリング朝期における学芸のキリスト教化の傾向に合致している。レミギウスの『ドナトゥス註解』にも似た記述があることから、この註釈はレミギウスの弟子によるものである可能性が高い。

『ソロモンの哲学の書』の分析

『ソロモンの哲学』は、①世俗的区分論(カッシオドルス『聖俗学問綱要』、ボエティウス『イサゴーゲー註解』、マルティアヌス・カペッラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』)と②キリスト教的区分論(カッシアヌス「霊的知識について」)を組み合わせた独自の学問体系を提示している。この史料は約30点の写本が伝存し、I系統、II α 系統、II β 系統の3つの系統に分類される。特に注目すべきは、II β 系統において学問の名称が「ギリシア語化」されている点である。

「ギリシア語化」の分析

『ソロモンの哲学』の成立地については、モッレーシがカッシオドルスの『綱要』との類似性を指摘し、ウィウアリウム修道院(イタリア南部カラブリア州)での成立を示唆していた。ウィウアリウムはカッシオドルスによって540年頃に創建された修道院で、ラテン語とギリシア語の二言語併用体制を採用しており、『ソロモンの哲学』の典拠となる5つのテキストをすべて所蔵していた。

しかし、『綱要』と『ソロモンの哲学』における「ギリシア語化」の性質は根本的に異なることが明らかになった。『綱要』(Δ系統)の場合、ギリシア語原典からの直接引用も含み、ギリシア語の語尾変化を維持した「翻訳」の形をとる。一方、『ソロモンの哲学』(II β 系統)では一貫してラテン語の語尾変化を使用した「字訳(音訳)」の形をとる。例えば、理論学(θεωρητική)は『綱要』では「ΘΕΩΡΗΤΙΚΗ」と表記されるが、『ソロモンの哲学』では「ΘΗΟΡΗΤΙΚΑ」と表記される。また、論理学(λογική)について、『ソロモンの哲学』のII β 系統写本はすべて「ΛΟΙΚΑ」と表記している。これはギリシア語の「Γ」が毀れたわけではなく、ラテン語写本の「LOICA」という異読をもとに字訳したものと考えられる。この「LOICA」という異読は、7~9世紀のアイルランド系文法家のテキストに頻出するものである。

アイルランド人とギリシア語の関係

アイルランド人はギリシア語に強い関心を持ち、自らのルーツをギリシア人に求める傾向があった。「オマルコンリー語彙集」(8世紀前半)の序文には「アイルランド人はギリシア人を起源としており、言語についても同様である」と記されている。アイルランド由来の写本、例えばコデックス・アダムナヌス(704-713年頃)では「finitur secundus liber」が「ΦΙΝΙΤΥΡ ΧΗΚΥΝΔΥΚ ΛΙΒΕΡ」と字訳されている。これは『ソロモンの哲学』(II β 系統)と同様の「ギリシア語化」の例である。

II β 系統写本の筆写地域は、ザンクト・ガレン修道院(2点)、ロルシュ修道院(1点)、イタリア(1点)であり、いずれの修道院でもアイルランド系の写字生が活動していた。このことから、II β 系統はアイルランド環境下の大陸修道院で成立した可能性が高い。

『ソロモンの哲学』の成立と伝播

大陸・島嶼含め、9世紀以前に『ソロモンの哲学』の典拠(『綱要』『イサゴーゲー註解』『結婚])が参照できた場所はウィウアリウムしか存在しない。しかし、「エピナル・エアフルト語彙集」には『ソロモンの哲学』から採録されたとされる項目が存在し、8世紀中葉のイングランド環境下で作成された断片写本にI系統特有の加筆を含んだ『雅歌註解』の引用が確認されている。これらの事実から、『ソロモンの哲学』の構成要素のうち、①の部分だけがウィウアリウムで成立し、それが7世紀末までに島嶼に伝わり、現地で教父のテキストと結びつけられた可能性が高い。本研究の結果、I系統およびII系統の祖型は、ウィウアリウムからもたらされた①をもとに、サウサンブリア(おそらくカンタベリー周辺)で7世紀末までに編纂され、II α 系統はフランス北部で普及し、その一部はさらに南下して、ロルシュかザンクト・ガレン周辺で「ギリシア語化」されたと考えられる。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※ 修士論文・博士論文は含みません。

④ その他

口頭報告「初期中世の自由学芸論における「ギリシア語化」の問題-ウィウアリウムとアイルランドの事例から」、ワークショップ「中近世キリスト教と知の継承 II」、@早稲田大学戸山キャンパス、2024年11月15日